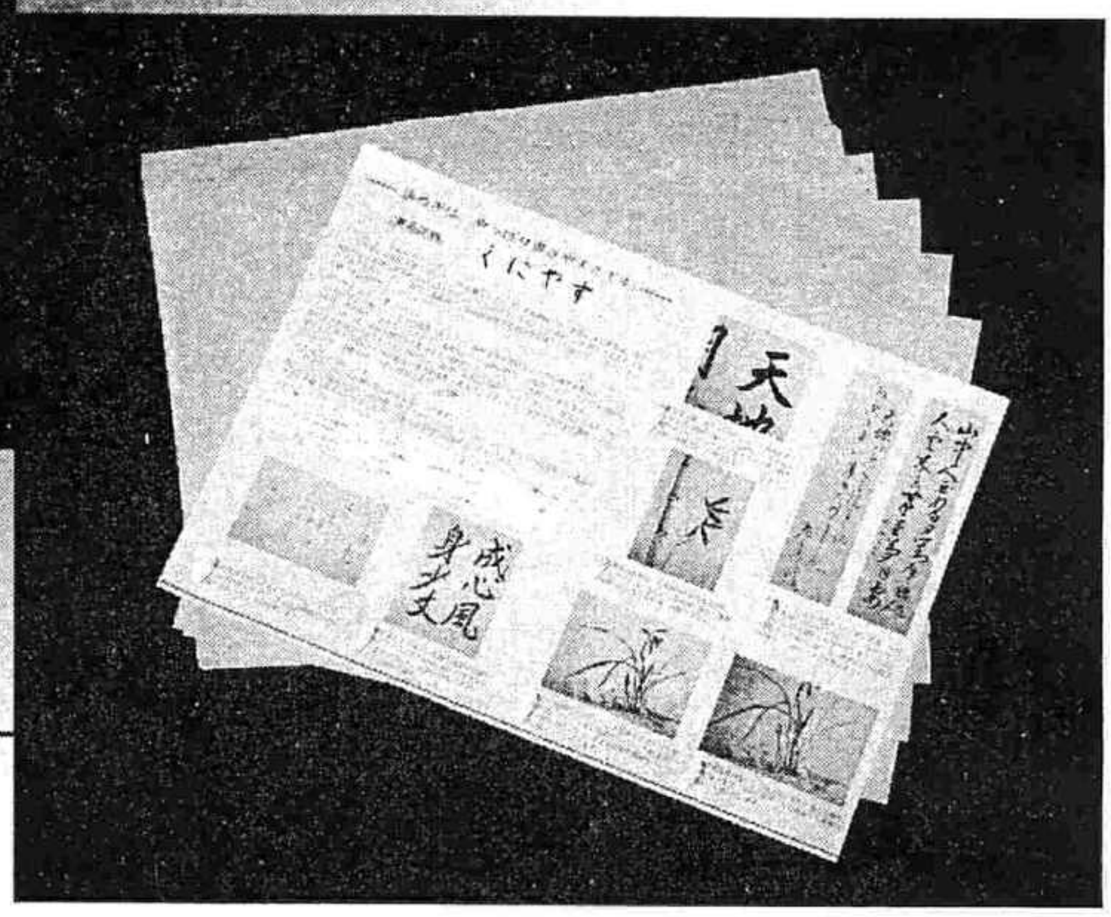
No.8
1998.12

ごみを減らそう!!

「おかえりティッシュ」と「ただいまロール」



新聞古紙100%の書道半紙「くにやす」

gomi情報最前線

古紙の価格暴落に並行して、昔からの循環システムの存続も危ぶまれる中、古紙を再生しよう、もっと使おうという小さな芽が生まれ、育ってきている。その動きをいくつか拾ってみた。

新聞古紙を使ったグレーの書道半紙が売り出されたのは、今年の春。白色度四十程度かと思われる黒ずんだこの紙を仕掛けたのは谷口松雄堂（京都市南区）。「古紙の需要が少しでも増えれば」と、自らアイディアを出し、愛媛県の製紙メーカーに呼びかけた。「環境を考え、自分に出来ることをやってみたかった」と谷口社長は、前向きな姿勢で語る。

次に紹介するのは、約三百の団体が牛乳紙パックの回収・再生に協力し生まれた市民ブランド「おかえりティッシュ」と「ただいまロール」だ。この二月までは別々に回収・再生していたが、製紙会社の廃業に伴いルートが途絶え、困りきった各団体が新しいリサイクルネットとして「関西ミルクロードの会」を結成、商品化を実現させ、この九月に販売に漕ぎ着けた。商品一個につき、一円が、基金として運営にあてられる仕組みだ。牛乳パックを回収に持ってくる行動と、使うという行動が結びついた同会の活動は、まさに循環の理想のかたちといえる。

子どもたちに見えるかたちでのリサイクルを狙い、使用済みの割り箸を回収し、製紙メーカーに送り込もうとしているのは、京都嵐山ライオンズクラブ。一カ月で約二百キロも集め、鳥取県米子市のメーカーに送る手はずを整えている。

その気になれば、だれにでもはじめられそうな回収・再生への小さな動き、三例。ここまではできなくても、せめてオフィスで家庭で再生紙を使うことだけは心がけたいものだ。

京都市ごみ減量推進会議

●ごみ問題討論会●

「もっと使おう再生紙」

古紙の価格が暴落し、市場の存続さえもが危ぶまれる中、昨年12月京都市ごみ減量推進会議では、緊急アピール「資源保護とリサイクル推進のために、再生紙の利用を促進しよう」を採択した。その流れを受けて、再生紙について考え、使用を促そうと討論会を開いた。去る10月25日（日）午後、ごみってなんやウィーク'98の一企画として開催された、討論会の模様を誌上で再現。

とき／10月25日（日）午後1時30分～午後4時　　ところ／元京都市立龍池小学校2階講堂

PART 1

京都東ローターアクトクラブによる寸劇：
「すべてはここから始まる」

PART 3

討論会　コーディネイター：高月　紘氏
パネリスト：宇高昭造氏　大橋正明氏　西中　宏氏　大島芳和氏

山内　寛（やまうち・ひろし）
'95年京都市ごみ減量推進員、めぐるくん推進友の会代表幹事を務めた後、'98年4月より同会の会長に。今年3月、山科・西野地区ごみ減量推進会議・めぐる会の設立に参画し、活動中。

谷藤佳孝（やとう・よしたか）
谷藤紙業株式会社代表取締役。古紙問屋を経営。京都市廃棄物減量等推進審議会委員、京都府紙料協同組合理事、全国製紙原料商工組合連合会理事、近畿製紙原料直納商工組合理事を務める。

PART 2

基調報告：古紙回収実践事例
山内　寛氏（山科・西野地域ごみ減量推進会議）

古紙の実状
谷藤佳孝氏（京都府紙料協同組合幹事）

基調報告

古紙回収実践事例

山科西野地域ごみ減量推進会議めぐる会　山内　寛氏

'98年3月、6人で立ち上げて、4月からは古紙回収リサイクル運動として、拠点回収を進めてきました。当初は、2カ月に1回、有償だったのですが、京都市ごみ減量推進会議の基本であるパートナーシップの実現というところから、会員である京都府紙料協同組合との連携で取り組むようになりました。分別を徹底させ、無償で回収してもらっています。今後の課題は、再生紙を使い、自分たちにまた戻して使っていこうというつねりをつくることかと思います。

古紙回収業者の立場から―

京都府紙料協同組合　谷藤　佳孝氏

古紙の流通問屋を代表しまして報告いたしますと、古紙の価格が暴落し、回収を進めることができず、市民の皆様にご不便をおかけしているだけでなく、我々も非常に苦しい状況に置かれていることをご理解いただきたいと思います。使われる先のないまま、使われる以上の古紙が集まり、価格は下がる一方です。この状況を打開するには、古紙の需要を増やすよう環境を整備することが策として考えられます。全国的に見て京都での古紙回収率は低く、何とか流通する手だてはないかと今、検討しております。

高月：古紙は現在、分別して回収しようという動きはあるのですが、「使う」というところが鈍いようです。今日は、そこに焦点をあて古紙をどうやって使っていくか、使うためにはどんな問題点があるのかを中心に議論していきたい。そしてごみ減量の方向性を見つけることができればと思っております。では、それぞれのパネラーの方にお話をお願いいたします。

—メーカーの立場から—

美しさへの高いニーズが再生品の拡がりを阻んでいる。（宇高）

宇高：紙の再生における問題点について述べたいと思います。ごみ問題のシンポで再生紙の話をする場合、再生紙は、ごみから作ると誤解されることがあるので申し上げますと、紙は、歴史的に見ましても、再生品として誕生しており、ごみにするのではなくリサイクルしたいという思いで回収された資源から作られています。古くは質の良くない再生紙でも喜ばれましたが、最近は高品質が求められ、特に日本では白いもの、柔らかいものが好まれます。実は、昭和45年頃までは、日本のトイレットペーパーは100％再生紙だったのです。ところが今日、約35～40％がバージンパルプの製品になっています。

ところで紙の再生では歩留まりという問題があります。例えば、牛乳紙パックという資源がありますが、これはラミネートした紙なので、再生する過程でラミネートが産業廃棄物として出てきます。私が住んでいる四国は海辺のきれいな島なんですが、こういった産業廃棄物の焼却灰での埋め立てが相当に進んで、幼い頃泳いだ海がなくなっているんです。これは、もう非常に悲しい。

歩留まりの問題とは別に、再生資源には供給量の安定、価格、品質の安定性が問題になってきます。また特に日本の場合、再生品に美しさが求められる点も問題かと思えますね。美しさへの高いニーズが、再生品の利用促進を阻んでいるともいえるのではないでしょうか。

とはいえ、私どもメーカーは、再生紙をより美しく、バージンパルプ紙に匹敵するものにしたいという一心で技術開発に努めてきました。そして、様々な加工紙にも対応できるよう格闘し、再生技術を開拓してきたんです。例えば、バージンパルプの白さは85％位ですが、現在、無漂白再生でも80％の白色度が可能になってきているんです。再生コストの削減努力もし、美しくて安い再生紙を生産することを目指しています。

しかし、古紙を出す側の意識ももっと問題にしてほしい。身勝手に加工されたものをリサイクルしようというのは虫が良すぎます。再生技術の開発では、水の使用を減らし薬品を使わないように工夫を重ねてきましたが、そこには環境のことを思い、自分の生まれ育ったふるさとを大切する心もあります。

そして、紙のリサイクルを促進するために、私どもが市民の皆さんに一番に申し上げたいのは、回収のことよりも、まず再生紙を愛用してほしいということです。

—市民の立場から—

リサイクルし尽くした後も、また、なにかに甦らせて使う。それが市民の力。（大橋）

高月：続きまして、大橋さんにお願いします。

大橋：私は、リサイクルバランスについてお話ししたい。再生紙を使うにあたって、リサイクルを様々な視点からとらえ、正しい方向性を見つけだしていくことが大切かと思います。これは、パッケージモールドです。（参加者に提示する）つまり、5～6回リサイクルを重ねて、もうここまでリサイクルしたんだから許してあげてもいいんじゃないかというのがこれです。それでもまだ使い途があるんですね。あるスーパーではこれを卵の持ち帰り用ケースとして活用しています。それはまたお客が店に持ってくるという様式ですすめていて、お客と店とのいい関係づくりに一役かっています。このパッケージモールドの例を出しましたのは、私たちが問題にすべきは、よく使うことなのだと強調したかったのです。捨てても仕方のないものであっても、もうひとひねりして永遠に使うような形を考えるのが市民の力ではないでしょうか。紙から紙だけではなく、他の使い途でもかまわない。断熱材、照明器具などいろいろありますよね。それを10年20年で定着させて行くことも大切です。そして紙そのものの由来を知っておくこと。どこから来た木であるか、木の生息する環境、その土地の人の生活や木を伐採することの影響と我々とのバランスはどうかなど。京都に住むなら、我々なりのリサイクルはどうしていくのか。それも大切ですね。それとオールタナティブという考え方がリサイクルを進める上で重要になってくると思いますね。

—企業の立場から—

自分のごみは自分で回収。それを実施してから社員の意識が変わった。（西中）

高月：引き続きまして、大日本スクリーンの西中さん、使う側の事業者という立場でお話をお願いします。

西中：大日本スクリーンでは、'90年頃からコピー用紙、コンピュータ用紙で再生紙を使い始めました。まだ質の面でも価格も問題が多く、すぐ詰まるとか、高いとかいろいろありました。でも、やっぱり使おうと使用を進めていきました。本社事務所だけで年間450万枚、一人当たり1カ月約550枚という量になりますので、環境に負荷を与えないところを重視しました。白色度については、当初は白くないことに違和感がありましたが、最近では逆に真っ白だと抵抗があるくらい馴染んできましたし、強さも問題はありませんでした。再生紙普及の次に実施したいのは、紙の使用量を減らすことです。コンピュータやOHPを使って説明したり、裏紙を使う、白い部分をメモにするというような努力を積み重ねていけば使用量を減らすことができます。

当社は、97年2月のISO14001取得時に、しました。同時に、ごみを分別し、削減しようとしたわけですが、その時、わざとごみ箱を小さくしました。すると、当初ごみが入らないから大きくしてくれという要求がきたんです。それには入るだけのごみの量に減らすよう努力をして下さいと対応しました。今年になって、ごみを自分で回収し、自分のごみはきちんと分別して捨てなさいという活動を始めますと、いっきに改善が進みました。自分で分別すると、他人が捨てたごみの分別状況が良く分かるとともに、手は汚れないように配慮するとか、他に迷惑をかけないようにとか、意識も行動もみるみる向上していきました。

印刷に関していいますと、日本の場合、汚れなどに敏感な土壌があり、再生紙は見た目に美しくないとの先入観があるのか、まだ10％の使用率しかないのが実状です。この辺り、印刷する側もユーザーもきれいな方がいいと決めて掛かっていますので意識改革が必要ですね。

—商品供給の立場から—

バージンはおすすめしないことにしたら売り上げが落ち込んだ。それでも続ける（大島）

高月：それでは、商品を扱っているという立場を含めて、京都生協の大島さん、お願いします。

大島：京都生協での商品供給事例として、トイレットペーパーとノートの話をします。'90年に環境政策を策定し、再生紙については使用基準と表示基準を示しました。トイレットペーパーは、プライベートブランドで再生紙を4品目、バージンパルプを2品目扱っています。この間の取組の中で、再生紙の利用は全体の80％位になり、バージンパルプの利用は、

20％位まで低下してきています。さらに、去年9月からバージンはおすすめしないでおこうということで特売をやめたところ、半期で単品約1千万円も売り上げが落ち込んでしまいました。私どもにとってはこれは大変なことなんです。それでも再生品の普及を重視しようと主旨を変えずに進めています。

ノートとなると状況は一変します。3種類作っていますが、一般メーカーの中性再生紙ノートを除いて、全体に占める利用は20％しかありません。失敗例をあげましょう。ブロックメモに至っては1年間で7千個しか出荷していない有り様です。単純に、再生紙を使いましょうというような呼びかけだけでは、かなりぼやけてしまうのではないかと思います。再生品そのもののデザイン、特徴、使い方も含めて分かりやすく、ユーザーに提案していく必要があるのではないでしょうか。

モデルとしてご紹介したいのが、買い物袋持参運動です。現在、買い物時の袋の持参が80％以上に広がってきています。この実例からして、再生紙に関しては私たちの組合員へのおすすめがまだまだ行き届いていないのではと思います。もっと利用されるような取組を今後も行いたいですね。

変わり行く再生品。白色度85％可能に。ロットもコストも大幅に改善されて（宇高）

高月：一通りパネリストの方に取り組みや方向性などを説明していただきました。会場の方にわかりにくい点があるかと思いますので、古紙の混入率と、白色度がわかる資料を配布しますのでそれを見ながら理解を深め、次の議論に入ります。

やはり消費者の方に白色信仰があるということですが、それを変えることは可能かどうか。製品づくりにおいて白色度80％のものを70％に変更する事への歩留まりや技術的なことなどを宇高さんにお伺いしたいのですが。

宇高：新聞紙は、白色度が60％程度です。トイレットペーパーを例にすると、バージンパルプの場合、白色度が高いもので86％位、低いもので80％です。再生紙でも最近は、白色度85％という白さが可能になってきています。古紙の混入率では、新聞紙が約40～50％使われています。トイレットペーパーでは、私どもではすべて100％再生紙で作っています。市場には50％のものもあり、様々です。段ボールでは、ほぼ100％が古紙で出来ています。

いずれにしても再生品は近年ずいぶん高品質になってきています。価格面については、再生品が高いと誤解されている場合もあるようですが、ことトイレットペーパーに関しては、過去に再生紙の方が高かったことは、一度とてありません。印刷用紙については生産ロットの問題があり、若干高かった時代がありました。現在は、ロットとコストの問題は改善されています。白色度について申し上げますと、白色度を少しさげたものが受け入れられるなら、歩留まりがさらに改善できるし、また利用できる古紙の種類の幅も広がります。

高月：今、古紙の価格の話が出ましたので、一例として申しあげますと、京都大学でも年間7千万枚位使っていて、今年の4月から、白色度70％、古紙混入率70％の再生紙に切り替えたところ、バージンより10％も価格が下がりました。そこまで状況は変化してきていることを実感しました。ところで、使う側としては価格だけでなくデザインのことも考慮し、選択肢があった方がいいだろうと思いますが、その当たり、専門家としてはどうですか？大橋さん。

大橋：古紙がだぶついているから利用を促進しようというのは、本来の意味からずれています。今から1年前、京都市ごみ減量推進会議の事業で子どもたちのごみアートコンテストをしました。その時、参加した子どもたちにドイツ製の再生紙100％のノートをプレゼントしたんです。白色度の低い紙に美しい鳥の絵が描かれています。どうですか？真っ白じゃなくてもきれいでしょう。それがいいたいのです。このノートは、一つのメーカーが作ったものではありません。多くの人々がノートを通してひとつになるという、鎖のような活動の成果といえます。企業の協賛があり、再生紙の提供があり、WWF（世界自然基金）への貢献があり、その上、エコロジカルな目標を記入するページまであります。このノートは、再生紙だから購入したわけではありません。単純にこれ買いたいと購買意欲をそそられたからなのです。デザインという面からは、そういうアイディア、そういう工夫が出来るということをご紹介したかったのです。

高月：ところで西中さん、ISOとの絡みでごみ減らしを定着させるにはどうすればいいのか、お話しいただけませんか。

西中：今の再生紙の話ではありませんが、ISOの社内での普及も似たところがあります。無理したり、我慢したりすると上手くいきません。やはり教育が大事ですね。再生紙を使うことでどう変わるのか。どう環境にいいのか。悪いところがあれば伝え、協力できる部分の協力を促す。そして、きちんと出来た人は表彰していくなどはっきりしたかたちで誉めるようなシステムを整備することが大事かと思います。

高月：大島さんにお聞きします。生協活動の中で、環境にいい商品をすすめてこられて、買い物袋は、かなり浸透したという事ですが、他の活動とどこか異なっていたのでしょうか。

大島：一言でいうなら、組織全体で取り組んだことに尽きるのではないでしょうか。タイミング良く、マスコミでレジポリ袋が有料になると報道され、反響が巻き起こったのが功を奏したようです。地域ごとの学習会を行ったり、アンケートをしたりと組合員と直接、対話しながら切り替えることが出来ました。反対にノートの場合、作ったというだけで終わっています。先ほどの大橋さんのドイツ製のノートの話、私たちも大いに参考にしたいですね。

—参加者のご意見—

分別こそが再生品をきちんと利用する基本では？（会場からの声：平井氏）

高月：そろそろ会場からもご意見をいただきたいのですが。

中島：生活学校で活動を続けている中島と申します。私たち生活学校では、今から約8年前、公共施設、ホテル、商業施設に対し、再生紙のトイレットペーパーを使うよう要望書を出してきました。当時はバージンが圧倒的でした。現在、大半の施設が再生紙に変え、成果となって現れています。商業施設のトイレには、再生紙であるとの表示がされているはずです。とにかく、自分たちが使うだけではなく、使ってもらうために行動を起こしたことが、こういう形になったと話しています。市民の立場でも、やれば啓蒙できるという事を経験しました。

西中さんにお願いしたいのは、ISO14001を取られたという事ですが、市民にはそれが見えてこないんです。だからもっとPRしていただけないかと。もうひとつ、大島さんに…。共同購入に関わるチラシなど紙類の回収ルートの整備についてお伺いしたい。これだけ共同購入システムが完成されているわけですから、自分たちが出した分だけでも回収できないかと切に願います。それから、バージンの特売をやめたら、売り上げが落ち込んだということですが、あるスーパーでは、80％もバージンをやめ再生のトイレットペーパーを増やしていったところがあります。その店では、バージンが殆ど売れなくなったということです。売る側の姿勢によってバージンは減らせるという事を実証しているわけですね。

平井：京都視聴覚者の会で環境部会をしております平井です。どうも古紙になる原料の種類が混乱しているように思えます。私たちは分別をきちんとすることが再生紙の利用を有効にする基本であるとPRしたいんですが、肝心の分別が徹底していないのでは？チラシを例にすると、分別したがために、有償

で回収してもらうことになります。今、もし有償を「払うのがいやと」拒否するなら、チラシはごみに出し、焼却炉行きです。さらに今、チラシが大量に増えて困っているのですが、本当にいるものか、リサイクルしやすいチラシはないか、素材やインクの問題も含めて気がかりなのです。

高月：今のご質問にお答えいただけますか？まず、宇高さんから。

宇高：トイレットペーパーというのは、もう再利用できない紙です。だから再生品で良いのです。そして、どんな古紙からでも作れます。

新聞チラシの話ですが、古新聞の新聞紙への再生が昭和45年頃から始まりました。当時は、分別していないとチラシ側のインクの脱墨がうまくいきませんでした。最近は、分別しなくてもいいくらいに脱墨技術が向上しています。分別のやり方は、古紙の再生技術に直接関連します。再生技術は発展していきます。じっとはしていないんです。コストダウン、強度を上げる、品質を上げるというニーズのもとに、私たちメーカーは一生懸命努力していますが、それを積み重ねると分別が必要なくなってくることもあるんです。

高月：大島さんへの質問がありましたね。

大島：ご指摘の商品案内の件ですが、今、最も要望が集まっていることで、今年内部的に検討することになっています。紙自体の使用を減らす方向でいつも利用する商品を載せる保存版と、日売品を紹介する案内とに分ける考え方で試作をしております。また、回収の件ですが、例えば、私どもが商品案内チラシに使っている古紙混入率80％のものではトイレットペーパーにするにしても不向きな品質ということで、再生品として利用できるリサイクルを考えると、なかなかすぐには実施しますとは言えないのも事実です。

バージンパルプの件ですが、実感としてまだニーズがありますので、商品供給そのものは検討していません。今後どうするのか、求める人が納得できるかたちを考えたいですね。

高月：西中さんにお願いします。先程、質問のありました企業のISOに対しての市民の理解を促すという点どうお考えでしょうか。

西中：当社は実は、京都市内で一番目にISOを取得しました。ただ、市民の方へのPRはできていない。今ご指摘のように企業活動を市民に見えるようにすれば理解も深まるし、市民も我々企業の意識も向上するのではと思いますね。ただ、どう情報を開示していくのかというところは、課題で今後は地域のイベントなどへの参加も考えたい。

高月：ここで谷藤さんにご質問します。宇高さんの方ではいろいろな物が混ざっていても再生可能ということですが、現場として市民として新聞紙とチラシとを一緒にするとどうなのか、古紙回収問屋の谷藤さんにお願いします。

谷藤：新聞紙とチラシの選別の件に関しては、できるだけそれぞれのご家庭で分けていただいた方が、古紙回収問屋の私たちは助かります。一緒でもかまわないというメーカーと、新聞紙だけしかとってくれないメーカーがあって混ざった状態で回収されてくると、私たちには大変な負担になります。だから私たちは、今、できるだけ分別していただくようキャンペーンをしているのです。

高月：同じ品質の物が集まれば、当然、いいリサイクルの仕組みができていきます。今日は、再生紙はもちろん環境問題に関心のある方が集まっておられるので、この情報をできるだけ多くの方に伝えていただきたい。それは、京都市ごみ減量推進会議の役割でもあるかと思います。では、最後に大橋さんに締めくくってもらいましょう。

大橋：こういう時代にあって、学びたいことがあります。明治2～3年にかけて、京都市民は、教育や人材育成を重視して、市民自ら三十以上の小学校を建てたのです。学ぶことは、最高の資産だと考え、自らの力で実践したのです。その歴史的事実を現代に置き換えてみましょう。小学校でISOの認定を受けるところがあっていい、ゼロエミッションに取り組んでもいい。ケナフを栽培して、ノートを作り再生してもいい。自ら作れば、簡単に捨てない。そんなことを学んでいけばすごい財産になるんじゃないか。どこからはじめてもいい。それは、きっと環境をこれ以上壊さない、地球とより良い関係を築く道につながって行くはずです。

高月：今日は、再生紙を中心に、白色度ということで議論してきました。白いという意味を文化としてとらえ直す必要があるのではないか。日本では白が尊ばれてきましたが、白ければ衛生的との誤解があるのではないか。白イコール衛生的とは違います。そんなことが浮かび上がってきました。

今後も幅広い議論をくり返し、更なる取組を実践していきたいと思います。今日は、貴重なご意見ありがとうございました。

高月　紘（たかつき・ひろし）

京都大学環境保全センター教授。京都市ごみ減量推進会議会長。ごみ問題全般について研究。京都市のごみ減量対策をはじめ、数々のごみ問題に取り組んでいる。TV・新聞などマスコミへの登場も多い。HighMoonのペンネームで地球環境保全をテーマとした漫画を描き、「ゴミック「廃貴物」」「絵コロジー」などの出版物も多数ある。

宇高昭造（うだか・しょうぞう）

再生トイレットペーパーの草分けである泉製紙株式会社専務取締役としての活躍をはじめ、愛媛パルプ協同組合エプコム21会長、愛媛県紙パルプ工業会環境保全委員長など、業界のリーダー的な役割も果たしている。近年は、環境イベントなどで再生紙製品の愛用を訴えている。

大橋正明（おおはし・まさあき）

環境市民理事。日本でも指折りのNGOとして知られる環境市民の設立当初から参画。理事として組織の基盤づくりに寄与してきた。最近、「みどりのニュースレター」に、「あしたはECOサイズ」という連載を執筆中。勤務先の大手広告代理店・大広では、地球環境プロジェクトチームのリーダーを務める。

西中　宏（にしなか・ひろし）

大日本スクリーン製造（株）本社総務部施設課課長。1997年2月ISO14001本社事務所取得時の事務局を務め、その後、内部監査委員会委員長を経て、現在、廃棄物管理委員会委員長を務める。再生紙の使用促進、ごみ減量などの徹底に取り組んでいる。JACO内部監査員およびEARA公式監査員補資格を持つ。

大島芳和（おおしま・よしかず）

京都生活協同組合理事会室環境担当課長。総合企画室企画担当、南ブロック事務局組織担当、組合員活動企画室企画担当などを経て、現職に。1996年度は、環境マネジメント、環境監査制度の導入に取り組んだ。毎年、環境事業活動の企画推進にあたっている。

全市キャンペーンの動き

47店舗と103の商店街が手を組み、簡易包装キャンペーンを実施

去る11月20日（金）～12月20日（日）まで、過剰包装になりがちなお歳暮シーズンを見計らって、「地球を守りごみを減らすために、簡易包装にご協力ください。」を統一キャッチフレーズに簡易包装キャンペーンを展開した。参加各店の新聞広告、チラシ等での呼びかけをはじめ、期間中、店内や店頭ではポスターやステッカー、スタンドPOPを掲示するほか、店内放送を通して取り組みへの協力を促した。また、購入商品の包装に関して、ノー包装を誘導するようセールストークを徹底。2つ以上の商品をお買い上げ時には1つの袋にまとめたり、買い物袋ご持参のお客様にはその袋に入れさせてもらう、ご一緒トーク、おまとめトークの徹底に努めた。

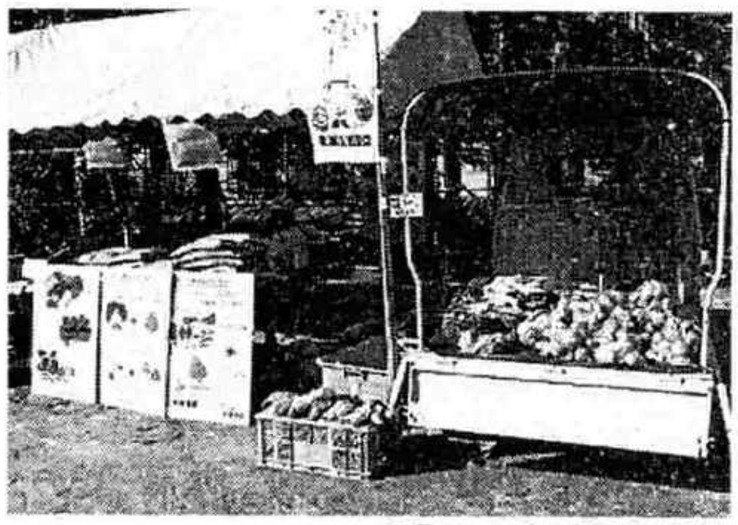
なお、今回のキャンペーンについて来年に実績報告が行われる予定である。

参加団体／●京都百貨店協会9店舗●京都生協20店舗●京都商店連盟103商店街●日本チェーンストア協会関西支部7社18店

秋晴れの空の下、1週間ごみと親しんだ。「ごみってなんやウィーク'98」開催

10/18（日）～10/25（日）・元京都市立龍池小学校

「ごみフェスタ」、「第2回ごみアート展」、「ごみ問題討論会」、「フリーマーケット京都」、「スタンプラリー」と企画も盛りだくさんに開催した「ごみってなんやウィーク'98」が幕を閉じた。京都市ごみ減量推進会議の基本理念である、パートナーシップによるごみ減量を具現化するため、多くの市民団体、企業、事業者団体、行政がこの催しに参画し、事業に取り組んだ。幸い好天気に恵まれ、初日のオープニングセレモニーから、最終日のごみ問題討論会まで滞りなく8日間を終えることができた。より多くの市民に参加してもらい、ごみへの理解を深め、ごみ減らしのきっかけを作ろうと、それぞれの企画を連携させ集客を図ったのが功を奏し、開催期間中の参加人員は五千人に上った。パートナーシップによる事業の取組やさらなる集客方法については今後の課題として積み残した。


ごみフェスタで再生品を販売

廃食用油で走るゴーカートも出現

子どもたちのごみアートコンテスト表彰式であいさつする桝本市長

買い物袋アンケート、3日間にわたって実施

昨年度、一澤帆布の協力を得て、作った当会議のオリジナル袋を使っている方も少なくないだろう。買い物袋持参運動の昨年の実績を踏まえ、さらに活動を前進させようと、アンケートを実施した。買い物袋持参への実態をつかむと同時に、持参を呼びかけるのが狙い。冬の気配が立ちこめる11月の下旬、大手筋商店街、大丸京都店、イズミヤ高野店と業態の異なる店舗にて京都市ごみ減量推進会議の会員数名が店頭に立ち、買い物客に協力を依頼し、その場でアンケートを行った。協力者には、あらかじめ作成した買い物袋を進呈した。アンケートは総数375サンプルを集めることができた。

大手百貨店、スーパーなどが独自で買い物袋持参運動をスタートさせるなど、マイバッグへの機運が高まる中、京都市ごみ減量推進会議のこの活動には、多くの期待が寄せられている。

●買い物袋アンケート実施
11月21日（土）大手筋商店街
11月25日（水）大丸京都店
11月30日（月）イズミヤ高野店
いずれも午後1～4時

NEWS

地域ごみ減量推進会議の動き

廃食用油の回収実績を機に
常磐野地域ごみ減量推進会議がスタート

今年1月より古い天ぷら油の回収を始め、実績を積んできた右京区常磐野地域女性会が母体となって、去る10月17日（土）常磐野地域ごみ減量推進会議が立ち上がった。発足と同時に、雨降り対策用のパラソルを付けたり、土台を整備したり、天ぷら油の回収設備を充実させた。また、11月19日（木）には、京都市環境局リサイクル推進課江川博係長を講師に招いて、「江戸時代に学ぶリサイクル」と題した講演を聴き、環境問題について学習した。

「御室や西京極からも天ぷら油をもってきてくれはるんです」と、梅原禎子会長。今後は、油の回収量を増やしていきたいと今後の展開に意欲的だ。

山科西野地域ごみ減量推進会議が
西野小学校の環境学習に協力

京都市の場合、環境学習は小学校4年生の教育プログラムに組み込まれていて、1年間で様々な環境問題について学ぶ。西野小学校の環境学習に、山科西野地域ごみ減量推進会議（めぐる会）が協力し、10月14日（水）2時間目後半にごみの実状や児童の暮らしの観点からごみについて話し合い、京都市空缶再資源化施設、横大路学園の作業状況のパネルを見ながら、なぜペットボトルを水ですすぎ、キャップを外して、決められた日に資源ごみとして出すのかなど、身近なテーマで学習を進めた。視聴覚室に2学級の児童65名に加え、森田校長、担任の先生2名は、同会議山内寛副会長の熱意のこもった話に耳を傾けた。また、当日洛東ロータリークラブの協力により作成したジーンズ素材の買い物袋を、同会議村西法子会長から子どもたちにプレゼントした。

今回の小学生を対象とした環境学習での試みは、続々と生まれる地域ごみ減量推進会議が地域の学校教育に参画する拡がりを持った、ひとつの手本として評価に値する。なお、この環境学習は、99年1月山階小学校でも実施される予定である。

新規会員のお知らせ

増え続けて、176会員に。
（1998年4月～11月末）

●市民〈市民団体、消費者団体、環境団体等〉
京都市民福祉センター
京都自由学校
京都消費生活有資格者の会
京都東ロータークラブ
京都YWCA
シャリフすこやか会
プラス ワン ネットワーク

●地域ごみ減量推進会議
葛野地域ごみ減量推進会議
常磐野地域ごみ減量推進会議

●大学
京都薬科大学

●事業者団体等
京都府旅館環境衛生同業組合
全労済近畿京都府本部

●企業等〈法人事業者等〉
旭商事
京都紙工
京都トヨペット（株）
（株）西京コクヨ
小坂産業（有）
（有）大工商店
醍醐病院
日本たばこ産業（株）京都支店
（株）古川駒商店
（株）都ホテル
（株）メスブ細胞検査研究所
（株）ヤマネ
（株）山文
（株）山本清掃
（株）レボ
ローム（株）
（株）ロンフォード

ゴミレポート

今年の学園祭のごみ対策と傾向

―京都大学学園祭から―

98年度11月祭環境対策委員会代表　小谷　馨

京都大学・第40回11月祭は、11月20日（金）～11月23日（月・祝）までおこなわれました。そこで学園祭から出るゴミを減らすために知恵をしぼり、また動き回っていたのが11月祭環境対策委員会（通称NF環対）です。当日のメンバー数は1日常時活動数で15人～20人程度、また他大学からの応援もありました。

NF環対の趣旨としては

○4日間出るゴミを削減することで、少しでも環境に配慮した学園祭にする

○遊びに来たお客さんに対してアピールすることで、普段の生活でも環境に配慮した生活を送る意識付けをする。

ことであり、その具対策となる活動内容としては以下のことがありました。

ごみを分別回収

(1) 吉田洗い皿の使用

吉田キャンパスでは食堂で普段使っているような皿を洗って何度も使用し、その分使い捨てトレーの使用を減らします。NF環対が模擬店に皿を貸し、模擬店がその上に食べ物を盛りお客に渡します。お客は買った模擬店に皿を返します。今年は約7000枚のトレーを削減しました。

(2) トレーリサイクル

模擬店で普通に食品を買ってもらう→回収ポイント（ゴミ箱に併設した6カ所）で、お客に使い捨てトレーをティッシュ・布でふいてもらう→リサイクルする企画でした。お客の方はまあまあの反応でした。ただ実際には水洗いしないとリサイクルできないとのことです。

(3) 中央貸し皿

洗い皿を行っていない中央キャンパスにおいて、NF環対がお客に直接皿を貸し出し、トレーの削減に努めました。最終日だけでしたが、約200枚の皿を貸し出しました。

分別回収したごみを整理

(4) 生ゴミ堆肥化（今年度は200店舗）

模擬店から出る生ゴミに発酵菌等を混ぜて埋め、来年の春には堆肥になるという企画でした。

(5) ゴミ回収と分別

公設ごみ箱から出るゴミをスタッフで回収しました。今年度はトレー、その他燃えるゴミ、ビンと缶、割り箸、ペットボトル、生ごみの6種類に分けて回収し

新連載：ごみとつきあう

我が社のごみ問題

株式会社 ワコール
総務部 課長　矢野　常光

我が社では、本社ビルで平成四年十一月からごみ問題に対応しています。その内容は大別すると、一分別回収、リサイクルに分けられます。

分別回収の対象は

☆空き缶と空びん☆生ごみ☆紙コップやパック☆ダンボール☆古紙類（コンピュータ帳票類、カタログ、新聞、雑誌、コピー資料など）☆乾電池　となっています。

さらに古紙類はリサイクル用として専門業者にひきとってもらっています。今年になって、ペットボトルの分別回収もスタートしました。

この取組は、現在も続けていますが、むずかしいのは社員の理解と前向きな協力がなかなか得られないということです。実効を上げるためには、社員一人ひとりの理解と行動努力が不可欠ですが、理屈では分かるが日常生活（私生活）も含めた習慣にまではいかないというのが現状です。

我々が、本当に取り組まねばならないのは、発生したごみを処分する方法よりもいかにごみの発生を抑えるかということだと思っています。

社員一人ひとりが、このごみ問題の原点とも言える部分に注目し、それが地域社会に輪を広げる時、ごみ問題は大きく前進すると思っています。

ました。

紙ごみとトレーの分別がうまくいかず、又人がそばにいる、サンプルをはる、回収時に底に目的のゴミを残しておく、○○のみ（例：トレーのみ、割り箸のみ）と書いておくと分別率が上がりました。

模擬店から出るゴミも分別して持ってきてもらいました。

（6）調査

模擬店の購入量と廃棄量を調査し、来年度の模擬店に買い方の参考として提言する予定です。

毎日のゴミからサンプルを集めて、有人と無人のごみ箱で分別の割合がどう違うかということに主眼を置きながら、学園祭に来た客の見ている前で分類、説明しました。また別途にわりばし、つまようじなど細かい分類を行い割合を調査しました。

以上です。

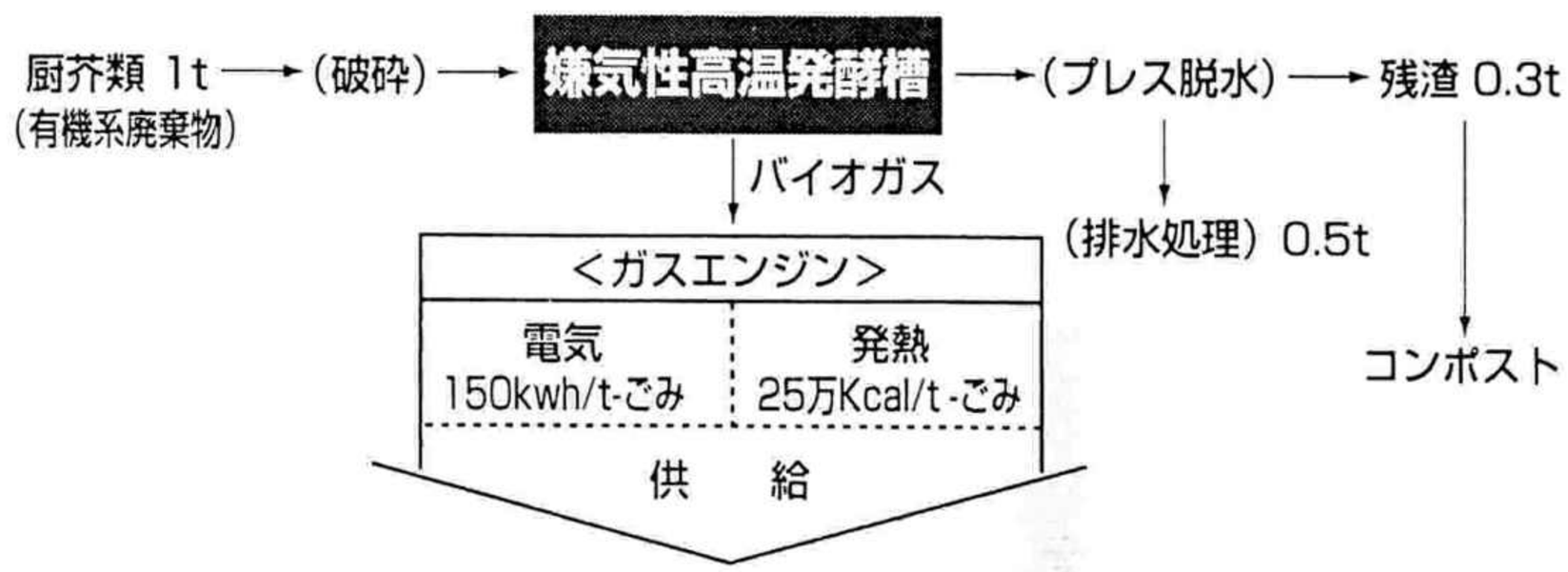
行政からのお知らせ

生ごみをバイオガスにして発電
画期的なリサイクルの研究を推進

京都市は、このほど生ごみをバイオガス化し発電する画期的なリサイクルシステムの実証研究に取り組むことを発表した。市が用地を提供し、民間企業7社と厚生省の廃棄物研究財団が技術的・経済的に支援するというかたちで来春より着手する。これは、平成10年5月に策定した「京都市一般廃棄物（ごみ）処理基本構想」において、基本的な施策の方向として打ち出した「ごみから資源・エネルギーを最大限回収するシステムづくり」に基づくもの。この実証研究は、近年ヨーロッパを中心に普及している技術で、ごみ焼却に伴うダイオキシン類等の有害物質の排出量が減るのと同時に、エネルギーの回収率が向上するとされ、多くの期待が寄せられている。

生ごみ等の有機物を嫌気性下で発酵させると、メタンを主成分とするガスが発生し、ガスエンジンによる発電や燃料として利用できる。さらに発酵後の残渣は臭気が少なく、塩類濃度も低いため、堆肥化すると良質のコンポストが得られる。

バイオガス化技術の概要



質問にお答えいただいた岡田洋子幹事、中川千恵子代表幹事、谷口　博幹事（左より）

Series

会員探訪

現在176に達している京都市ごみ減量推進会議の会員。それぞれにごみ減量への取組があるにちがいありません。知恵と工夫にあふれた活動に学ぶことは、ごみ減量への取組をさらに活発化させる上で、大いにプラス。ごみ減量に前向きな会員を訪ねていきました。

京都消費者モニター経験者の会

Q 京都消費者モニター経験者の会とは、どのような団体なのでしょうか？

A 京都市は、消費者モニターを一般から公募し、かしこい消費者の育成に力を注いできました。当会は、その教育制度を修了した人たちで構成され、昭和56年にスタートして以来、様々な観点から勉強を続けています。食品添加物の見方、悪徳商法にひっかからないようにするにはどうしたらいいのか、適正な価格など、消費に関するありとあらゆることを学びます。消費者モニターの過程を経て、もっと知識を身につけたい、さらに消費のことを考えたいという方が集まってできたのが京都消費者モニター経験者の会なのです。自主参加により運営され、現在150名の会員が活動しています。

Q 具体的にはどのようなことをされてきたのでしょうか？

A 月1回例会を開き、そのときどきのテーマで学習を進めています。かしこい消費者になることが目的ですので、テーマは限りなくあります。今年を例に挙げてご説明しますと、5月6月は消費者まつりの準備と実施に追われました。7月は水について考えようということで、琵琶湖博物館とメーカーを見学しました。琵琶湖博物館では、日々の生活に欠かせない存在でありながら知らずにいた、琵琶湖の生態系を知ることができ、参加者の皆さんもいろいろ発見があったようです。また、ある電機メーカーでは、節水タイプ洗濯機と乾燥機の生産工程を見せてもらいました。見学の後の質疑応答では、消費者としての立場から鋭い質問が飛び交い、商品づくりに対し、消費者の意向を反映することが、いかに必要であるかを痛感した次第です。

12月の学習会に参加された会員の方々

9月は、環境問題をテーマにセミナーを開催、JEE（日本環境国際交流会）・細木京子さんの「ダイオキシンの現状と課題」という大変熱のこもった話に耳を傾け、10月は、健康について、11月は野菜と健康についてそれぞれ講師を招き学習を進めました。今後も、暮らしのセンスアップなどの学習を予定しています。

Q なにか、ごみ減量への取組などはされているのでしょうか。

A ごみを出さず、無駄のない買い物をすることはかしこい消費者の条件です。私たちもできるだけ使い捨てしないような生活を目指しています。今年の6月20日・21日に開かれた第16回消費者まつり（会場：みやこメッセ）では、日頃の活動の場として、リフォームファッションショーを開いたりしました。古いきものを使ったドレス、コートで創ったベストなどを着た会員さんが次々と舞台に上がって、ちょっとしたショーになりました。タンスの奥に眠っていた帯地を活用したベストもなかなかの人気でした。

京都消費者モニター経験者の会のブースでは、ペットボトルのリサイクルの流れをパネルで展示するほか、リサイクル繊維でできたファッションをディスプレイしました。ごみの約60％を占める容器包装材、きちんと分別することでかなり減量できるはず。増え続けるペットボトル容器がリサイクルできることを知ってもらい、分別への協力を呼びかけたかったのです。

もちろん、その前に、実態を知るため、南部クリーンセンターに分別の状況を見学に行きました。

Q 消費者まつりでは、不用品を活用した暮らしのアイディア作品の展示もされたそうですね。

A 私たちの会員の中には、いろいろなアイディアを持った人がいて、創意工夫に満ちたアイディア作品が約30点ばかり集まりました。例えば、牛乳パックを利用した、筆立てとか、花瓶とか、布をリサイクルした枕とか、一点一点が暮らしの中から生まれたもので、キラリ輝いていました。来られた皆さんにも、容易に使い捨てるのではなく、不用と思われるものでももう一度見直してアイディアひとつで素敵な道具に生まれ変わるという、制作者の意図が伝わったのではないでしょうか。

Q 今後どのような活動に取り組まれる予定ですか？

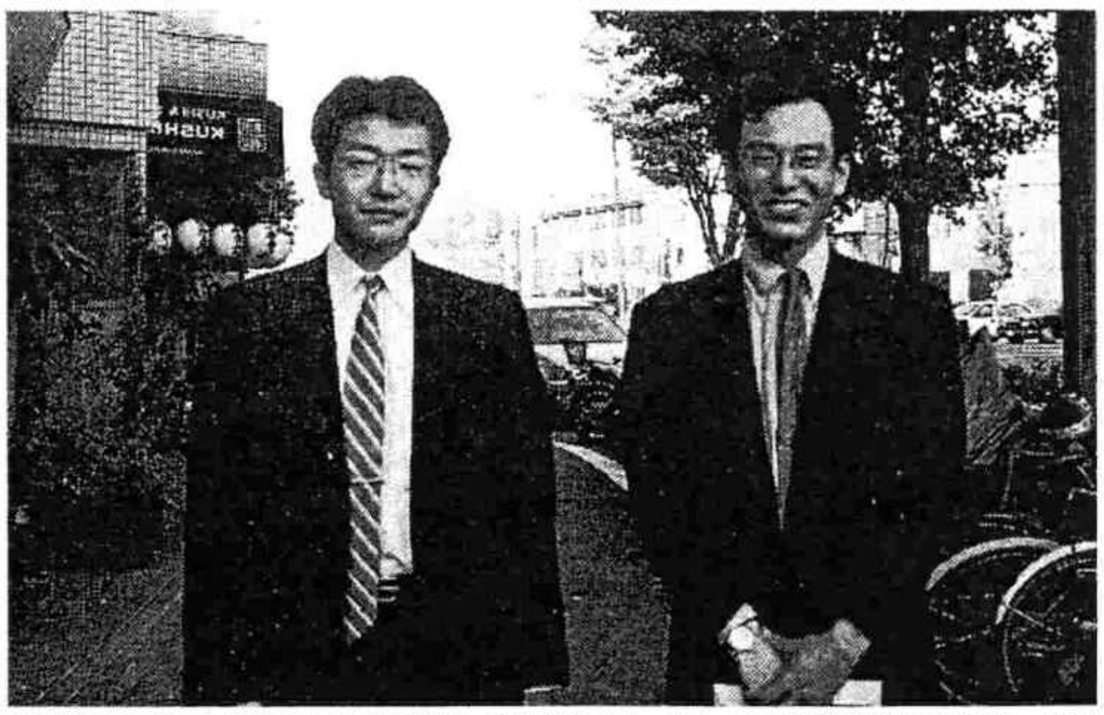
A 具体的には、まだ決まっていませんが、会員ひとりひとりがよりかしこい消費者を目指していきたいと熱意は誰にも負けないほど持っています。まず、消費に関わることを学習して、確かな眼で消費社会を観察する力を蓄えたいと思っています。環境や防災について、商法や商品について、知りたいこと、知らなければならないこと山ほどあります。どこまでできるか、それも大きな課題です。

京都市消費者モニター経験者の会

事務局所在地
〒604-8186
京都市中京区烏丸御池東南角アーバネックス西館　市民生活センター内
代表幹事　中川千恵子
幹　　事　谷口　博　岡田洋子
　　竹村寿美子

京都市消費者モニター制度を修了したOBで構成される、自主的な自己啓発組織。かしこい消費者を目指し、自ら学び、日々の消費行動に活かしている。会員は150名。

'98年12月12日京都府環境フェスティバルに参加



質問にお答えいただいた吉川商店常務・吉川善彦さん（右）と京都容器光陽社長室長・津村元英さん（左）

京都硝子壜問屋協同組合

Q 京都硝子壜問屋協同組合とはどのような団体なのですか?

A ガラスびんは酒・ビール、しょうゆ、酢など飲料や調味料の優れた容器です。捨てることなく20回も30回もくり返し使え、環境にやさしい。私たちの組合はリターナブルびんと呼ばれるガラス容器を、使用後に回収し、洗びんして、またメーカーに納める業務を生業としている業者、つまりびん商と呼ばれる業者の集まりです。京都には20社が存在し、発足は今から42年前に遡ります。私たちが、扱うのは生きびんと言われるリターナブルびんを中心に、数社ですが新びんを扱っています。びんを洗い、再利用できるようにするだけで、私たちの業界は成り立っていたのです。

Q 今、業界はどのような状況にあるのでしょうか?

A 一時は、隆盛を極めていましたが、一升びんの出荷を例にすると1975年の15億6千万本をピークに需要が減り、97年に6億2千本に落ち込んでしまいました。回収量も減り続け、十分な量を確保できず、経費も負担になり、採算割れを起こしかねない状況にあります。私たちの業界を支えている一升びんがなくなるとビールびんの回収さえも危ぶまれ、このまま減るとせっかく築いてきたリサイクルシステムが崩壊してしまいます。リターナブルびんの存在は、資源エネルギーやごみ、また味わいの面からも理想的なのに、利用が減っているのは残念としかいいようがありません。一升びんも含め、新しいびんがどんどん砕かれ カレット（原料）化されています。ワンウェイ容器がリサイクルされないまま焼却されたり埋め立てられているのを目の当たりにすると、胸がふさぎます。当然、私たちの業界にも危機感が広がっています。

Q 回収量が減っているのはなぜ?どんな要因があったのでしょうか?

A 一言で言うなら、消費者のリターナブルびん離れということになるのでしょうか。近年、酒は紙パックに、ビールやジュースは缶の勢いに圧倒され、しょうゆや油はペットボトルに屈しています。メーカーは消費者のニーズがより便利な方へと移行しているのだからと、とらえているようですが、環境のことを考えると、これらの容器に比べ、びんが断然環境にいいことは明らかです。アルミを張った紙パックはリサイクルすることができません。缶は、自販機で売られ、どこでもいつでも飲めて便利なようですが、リサイクルにはエネルギーもコストもかかります。ペットボトルも同じです。ヨーロッパでは、飲料容器の主役はガラスびん。全容器の約80%がリターナブルびんです。デポジット制が浸透していて、消費者が店へ返しています。返びんのための専用カウンターがあるとも聞いています。だいたい30回は使用するそうですね。また、どうしてもリユースできない物はリサイクルしていますが、街角に緑、茶、透明の色別にボックスが置かれ、回収されています。ヨーロッパの国々は環境のことを考え、びんを大切に使っているのに対し、なぜ日本では使い捨て容器がのさばってきて環境によくない道を進んでいるのか疑問がふくらむばかりです。

Q この状況から脱するため、どのような対策を考えておられますか?

A 今、組合の会員が集まってどうすればいいのか話し合っているところです。大きな課題として、デポジット制の導入に向けての行動があります。時間はかかることでしょうが、法的な措置が礎にならないとリターナブルのシステムは守られないと思いますね。すぐにやれることとしては、消費者に対し、リターナブルびんの良さをもっと紹介し、回収・使用への協力を呼びかけたいですね。また、意識のある酒販店や回収・使用に協力的な消費者が集い、リターナブル友の会のような団体をつくろうかという案もあります。いずれにしても、のほほんとしていられる状況ではありません。なにかしなくては…。

Q この10月に開催された「ごみフェスタ」に参加されたそうですが…。

A 一種の啓蒙活動になりますね。リターナブルびんをいろいろ並べ、種類をご紹介しました。またリターナブルびんの現状を特集した番組のビデオも流したんですよ。それに、私たちびん商にとって、めったにない消費者との接点ですのでアンケート調査も行いました。一升びんやビールびんを行政のごみに出す人が結構いたりして、いろいろ参考になりました。このデータを財産として今後の活動に生かしたいものです。

京都硝子壜問屋協同組合

事務局所在地
〒612-8377
京都市伏見区島津町28（株）洛正内
代表理事　吉川　稔英
会計理事　大井　　正
酒・ビール、しょうゆ、酢のガラス容器を酒販店より回収し、各メーカーに納入。また雑びんも回収し、色別に割って製びんメーカーに納入している。レンタルプラスチックケースの洗箱も行っている。
組合員数　　20社

「ごみ」ご意見番

ごいけんばん

10月18日(日)から10月25日(日)まで、8日間にわたって開催された「ごみアート展」では、メッセージコーナーを設け、ご来場になった方々からのご意見をいただきました。今回は子どもたちからのメッセージをご紹介します。

ごみアート展へのメッセージ

子どもたちの素直な感動の声がうれしい。

●ごみはたくさん出るからすてていたけどちょっとしたアイディアですてきなものに変身するんだね。
●ごみでできたものはきれいだった。（えりこ5歳）
●ごみはすてるものだとおもったけどごみでものがつくれるとはおもいませんでした。
●芸術的でよかった。とても思いがこもっていました。
●わたしの学校にもリサイクルとか、かんきょうがすきな先生がいるので、わたしの学校にもこういうのがあったらいいなー。
●ぎゅうにゅうパックでつくったカヌーがおおきくてりっぱだった。
●オモシロイ！おもしろい！面白い！！ごみがごみでなくなった。
●いっぱいのペットボトルやあきかんでおもちゃをつくってすごいな。
●M・ババッチ用の鉄骨と人型かかしをさがしに行きます。きょうは楽しかった。明日も昼からコンニチワです。
●ごみアートの会場が廃校であるのは計算されたものなの？。古い校舎に展示されたごみたちがよかった。
●カンでライオンをつくるのがおもしろかった(りか)
●ごみだって少しかえればすごい物！
●ごみをつかっていろいろなものができるんだ
●ごみだって生まれかわるよ。新せいひん(やすなり)

ごみと人間へのメッセージ

辛辣な批評家の目を持っている子どもたち

●きれいです。上手につくってありますが、これもごみになってしまうのかぁ。でも、ごみを恐れていると人間の進歩は考えられない。
●ごみは人間が出すのに、人間はうまくごみをしまつできない。だからこそリサイクルか？
●ごみを使って、いろんなことをしているのを見てすごいと思った。きたなくてすぐにすててしまうごみでも、こんなことに使えることがわかったので、わたしもごみでなにかを作りたい！こうしていけば、ごみもすくなくなってちきゅうもきれいになると思う。おとなの人が、ごみをすてているので、わたしは、おとなの人たちにごみがこんなにすごいことに使えるということをしってほしい。わたしもときどきごみをすててしまうことがあるのできをつけたい。（なつこ）
●資源をごみにする人、生かす人、本当にあるのは人間の形をした始末に困るごみがある。
●ものにだってひとつひとついのちがあるよね。ごみにも、もちろん。
●ぼくはやくたたずじゃないぞ
●ごみそのものが悪いんじゃない。それを生み出す人間の行動に様々な問題があるんだよね。私はごみを出さないよう努力したいです。
●ごみごみひとごみひともごみ？小さい地球にともにすむ
●人の前にごみはない。人の後ろにごみはできる。

ごみを減らそうとメッセージ

行動への気持ちを言葉に

この決意を大切にしてほしいな…。

●ごみはあまりださなくしてもってかえり、ごみはいろいろなリサイクルにつかい、かんきょうをまもり、きれいな町にしよう。これを守ってほしい。（たくろう）
●ごみを少なくしよう（ゆうた）
●リサイクル青い地球をとりもどそう（あやか）
●ごみをへらしたい。きれいなまち。
●ごみのない世界を作っていこう！！（もとき）
●ごみをへらそう
●ごみをへらしてできるだけリサイクルしよう
●みんなの力でごみをへらして行こう
●どんどんふえているごみ。今から少しづつへらしていこう！
●ごみをださないようにするよ。やくそくするよ（ゆうき）

どう感じてもらえたのかな？

なかなか鋭いね

あなたのご意見をお寄せください

このページは、ごみに関する自由な発言コーナーです。どなたでもどんなご意見でも歓迎します。京都市ごみ減量推進会議までお手紙をどうぞ。

〒604-8571　京都市中京区寺町御池
京都市環境局事業部
リサイクル推進課内
☎ 075-222-4091
FAX 075-213-0453

京都市ごみ減量推進会議 会報「ごみを減らそう!!」NO.7
1998年（平成10年）12月発行
編集発行　京都市ごみ減量推進会議

エコペーパー100（新聞古紙100%再生紙、白色度60）を用い、大豆インクで印刷しています。